県立多治見病院 緩和ケアチーム通信

2025年9月号 vol. 171

緩和ケアチームメールアドレス： kanwa@tajimi-hospital.jp

自施設での緩和ケアに関する悩みごと、県病院緩和ケアチームに対する意見や要望、
施設ごとでのオンライン事例検討や勉強会などの開催要望など、なんでもお寄せ下さい。

～ チームメンバーより一言 ～

薬剤師・長谷部 千夏

7 月に市民を対象とした痛みについての出前講座で講師を務めてきました。慢性疼痛、がん性疼痛ともに辛い症状を抱えてみえる方が多いのだなと思いつつ、痛みのコントロールをする際に目標の共有することはとても大切なことなのだと改めて感じました。がん性疼痛の緩和では、本人・家族が満足できるところを目指して医療用麻薬を増量していくことが可能であり、特に予後が長くない場合には、たとえ副作用があっても許容できる範囲で使用していきます。しかし慢性疼痛では、生活の質と日常生活動作を向上させて、健康を保つことが目標とするため、痛みを取りきることが目標ではなく、痛みと上手く付き合う術が必要となります。症状緩和を諦めて欲しくないとおもいつつ、状況によっては諦めなければならない場合もあり、薬剤師としてはモヤモヤしながらも講義を進めました。慢性疼痛・がん性疼痛にかかわらず、本人の目標と現実のギャップが埋められるように症状緩和に繋がる薬剤を提案しつつ、身体的にも精神的にも少しは楽になったと感じていただけるような関りを続けていきたいと思いました。

作業療法士・寺下 美智子

こんにちは、作業療法士でリンパ浮腫セラピストの寺下です。

仕事柄、多くの方々のからだに触れさせていただく毎日です。時折、「あたたかい手やねえ」と感想を述べられます。その時は、触れている手への注意を注ぎつつも耳への注意を深めるように心掛けています。

対象者からはいろんな辛い体験を語られることが生じやすいように感じています。「先週は本当にえらかった。死ぬかと思った。」「入院する二週間前から全然食べられなくてふらふらやった」「脚が痺れて冷たくて靴下を穿かないと眠られない」など「あーー」という感嘆詞と共にあふれる言葉に耳を傾けています。

私たちセラピストは単位制で仕事をしています。ゆっくりと語りを導き、心身のリハビリをバランス良く進めていきたい理想と廃用症候群を改善したい現実とのギャップに悩むことはしばしばです。

しかし、「あたたかい手やねえ」は大事なキーワードのひとつです。自分の計画したリハビリメニューを押し付けず、相手中心に徹底するためのグッドワードとして関わらせて頂き続けたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。